

草津市立矢倉小学校通信 令和元年5月31日 NO.4



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

緊張感をもち、具体的に動くことで力をつける

放課後、子どもたちの水泳指導を始めるにあたって、救命救急の研修をした。学校近くにある南消防署から救急救命士と隊員を講師に招いての研修だった。過日、大津で起こった保育園児や保育士を巻き込んだ交通事故のこともあり、できるだけ密度の濃い研修にしていきたい、いざとなれば適切に対応できるようにしたいというわたしたちはもちろん、講師の方々の願いもあった。

やぐらっこルームの中央に研修用の人形を据え、わたしたちは輪になり、座して挨拶をした。「研修を始めます、よろしくお願いします。」挨拶が終わるや否や、講師から「それでは、ここに子どもが倒れています。ここからここまでの先生方、こういう場面に遭遇しました。どのような対応をされますか、見せてください。」といきなり課題が投げかけられたのである。

その場の緊張感は一瞬にして高まり、指示された6人の先生方は、意識の確認から救命措置をする者、学校の近くという設定が説明されたので学校へ報告連絡に行く者、事故現場の交通整理をする者など、声をかけ合いながら動いていった。講師からは、その動きについて「できていますね」「これがいいですね」とか、「今のはですね、できれば、このように」など、評価や指導があった。いつもなら教える立場のわたしたちは、このときは学ぶ立場になり、真剣に受講していた。「こういう学び方は、身にしみてよくわかるし、なにより自信につながる。」研修を終えたときのわたしの感想だ。

「事故現場はこのような場面です、では、やってみましょう、どうぞ！」に始まり、「そう、これでいいんです。ハイ拍手！」と区切りをつけながら、さまざまな場面ごとの訓練である。そんな訓練と訓練の合間には、質問コーナーが設けられる。それまで具体的に動いているから質問もしやすく、そこでのやりとりが受講しているわたしたちの心に響き、充実感があった。

単に、救命措置の仕方、つまり胸骨圧迫の回数や力の入れ具合だけが習得すべきことではない。問題場面を学校としてどう受けとめ、対処するか、居合わせた自分は、組織としてどう動くかというものでないといけない。

講師から、こんな言葉をいただいた。

「日頃、学校から離れた私生活の場面でも、救急救命の技を身につけている学校の先生ということをお忘れなく、いざとなればぜひ動いてください。AEDを使う場面になり、いったんスイッチがONになれば、その場の音声はすべて録音されます。記録されるのです。責任が生じます。今回の研修でおわかりのように、できることはたくさんあるはずですが、騒がしかったら静かにするよう促したり、救急措置をしている方の補助を買って出たりしてください。野次馬として群がっている限りはただの野次馬です。その場から離れてもらいたいのです。」

具体的に動くことでチームワークが育ち、意識も高くなる、そんな手応えのある研修だった。

校長 大林 道範